
四季蘭采～雛菊～

森神。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季蘭采〜雛菊〜

【Nコード】

N6933E

【作者名】

森神。

【あらすじ】

突然あらわれた7人の魔法使いに巻き込まれる！！不思議な雛菊探しの始まりだ〜！

柄秘露愚（エピソード）（前書き）

キャラクターベース

「サキ」

この物語の主人公であり、アパートの大家さん。

得意魔法系統：回復系魔法

性格：のんきで天然

B 9 0 W 6 4 H 9 5

年齢：2 5 歳

身長：1 6 4

趣味：料理（食べること）

特技：料理（作ること）

柄秘露愚（エピソード）

ただいま…ボク

帰って来たよ。

さあー、みんな楽しもうよ。

さあー、宴を始めようよ。

桜、舞い散る満月の夜…。

彼女（？）は帰って来た…

この地へと…

「踊れ…。さあー宴の始まりだ…！。」

遠吠えのごとき声で、この現実世界とはまた別の、遠い遠い別世界で、物語は始まった。

柄秘露愚（エピソード）（後書き）

感想よろしくお願いします。

第一章：感染結界（前書き）

キャラクターデータベース

「サキ」

この物語の主人公であり、アパートの大家さん。

得意魔法系統：回復系魔法

性格：のんきで天然

B 90 W 64 H 95

年齢：25歳

身長：164

趣味：料理（食べること）

特技：料理（作ること）

第一章：感染結界

「お掃除、お掃除うれしいな〜！楽しいな〜！ヘイ！」

調子の狂った音楽を歌っているのは、自称、普通の魔女っ娘「南沙^{ミナミ}紀^{サキ}」である。彼女はこの、ササキ荘に住んでいる。ササキ荘は8部屋のアパートで、住んでいるのはサキだけというむなしいアパートだ。しかし、今日から住民が増える。しかも7人もだ。このアパートはいつきに満室になる。だから、こうやって、サキが掃除をしているのである。時間はもう昼の一時をすぎている。そろそろ来るところだが…

「お邪魔します〜う」

7人が同時に来たらしく、かなり大きな声が鳴り響いた。

「はーいどうぞ〜」

7人が同時に入ってきた。7人とも魔法使いである。

不思議な話である。7人の魔法使いが、同じアパートに同じ時間に集まるなんて…。しかしサキはそれを軽く無視してそれぞれを部屋に案内した。言い忘れていたが、サキはこれでも大家さんである。

オオニシサクヤ

「大西昨夜さんは2号室」

キジヨウレイミ

「木上麗美さんは3号室」

サカキハラユイ

「榊原結衣さんは4号室」

サイリヨウキリノ

「宰領霧野さんは5号室」

ホウトクシアヤ

「方徳慈綾さんは6号室」

サトウミコキ

「佐藤幸さんは7号室」

オオクラユキ

「大倉雪さんは8号室」

サキは皆を部屋まで案内すると、台所へ行き、新入居者歓迎会で出す料理の準備にいそしんでいた。しかしまあエプロン姿で台所に立つサキはかなりカワイイw包丁の使い方でわかるぐらい彼女は料理がうまい。

「今日は〜あたら〜しい人たちが〜きましたヨ〜」

また調子の狂った音楽を歌っている。そうとうの音痴らしい。

ふと時計を見るともう夕方の4時。歓迎会の準備はほぼ完璧だ。

「我ながら見事なできた。」

本人も言っているとおり。豪華ホテル並みの料理が立ち並ぶ、ボロアパルトには十分すぎるほどの準備だ。歓迎会は6時に行はれる。ちよつと早すぎだ。これじゃあせつかくの料理が歓迎会の時には冷めている勢いだ。まあしかし、彼女も魔法使い。2時間の間料理の温かさを保つことぐらいは簡単にできる。

「この料理を2時間の間、冷めないようにしてください。ミスタラ
フィクランドラー」

最後の呪文は、保温の呪文らしい。とくにするこの無くなったサキは、テレビをつけた。この時間は幼児番組を放送しているが、サキは25歳（バスト90）なのでいちようニュースをみた。この時間のニュースはバリエーションが豊富なので、2時間くらい簡単に暇をつぶせる。

「さて、次のニュースです。今日めい、れいじゅふひなきくちようさんちようめ霊樹府雛菊町参丁目（この世界で2番目に住んでいる人が多い町）で謎の結界が現れました。この結界により謎の感染ウイルスが発生し、全人口の8割が緊急入院しました。」

「えっ、霊樹府雛菊町参丁目って…おばあちゃん！」

「感染者確認の方は、『2631465』までご連絡ください。」
「電話しなきゃ…」

サキは一目散に受話器にむかい、『2631465』に電話をした。
「ご連絡いただきありがとうございます。こちら、特別ウイルス被害者確認センターです。」

「あー！みなみちかこ南智佳子という方は…おられるでしょうか。」
「少々お待ちください。」

ほんの1分程度の待ち時間もサキには5分ぐらいに感じられた。まあ無理も無い。サキはサキが3歳の頃に両親が離婚。母に育てられたが、6歳の頃に母が死に、それ以来、ずっとおばあちゃんに育て

られていた。だから、この事件はサキにとってはかなりのショックだったはずだろう。

「南智佳子さまみ該当する人物が1名いました。年齢86歳、誕生日8月7日、血液型A型よろしいでしょうか？」

「はい」

第一章：感染結界（後書き）

感想よろしくお願いします。

第二章：ボロアパしうじょーず（前書き）

キャラクターデータベース

「キリノ」

ちよとかわいい系の元気な子

得意魔法系統：光系魔法

性格：あかるい

B 8 4 W 6 0 H 8 5

年齢：2 4 歳

身長：1 6 0

趣味：ゴルフ

特技：ゴルフ

第二章：ボロアパしょうじょーず

「そんな…おばあちゃんが…」

あまりのシヨックで、いつもの音痴な歌もでてこなかった。

コンコン

ノックの音がする。

コンコン

サキは全然きずいていない。

「ごめんくださーい。」

ようやくきずいたようだ。

「はい、今出ます。」

流していた涙を必死でこらえた。

「すいません。気が付かなかったもので…」

ドワを開けると、そこには、新入居者7人組みがたっていた。

「知ってますよ。」

その言葉にサキは意味がわからず。疑問符を頭に浮かべた。

「今、何時ですか？」

「えっ5時半…」

違った。

「もっ、もう7時！」

「ええ、いやーパーティーのために、みんなで5時半に来たんですが、なんか鳴き声が聞こえたので、聞いてみると…」

「えっ聞こえてたんですか！」

「まあ…」

「……………」

「すいません、今すぐ、パーティーしますね。」

「いや…無理しないでください。」

「私たち7人は仕事でここに来たんです。」

「は？」

「結界については、私達は予想してたんです。」

「あのー、意味がわかりませんが…」

「実は、1ヶ月前に『TENSIIID』が復活したんです。」

「『テンシード』…。」

「それって、千年前になんたらあれですか？」

「そうです。」

『TENSIIID』について、皆さんに説明いたしましょう。TENSIIとはローマ字読みです。天使のことです。Dは墮。つまり、墮天使のことです。まあこいつは、千年前にこの地で数々の殺人を犯し、次元追放を食らったやつです。次元追放は、その名の通り、別次元へと追放されることです。普通は99・99%脱出不可能なのですが、何かの拍子に0・01%の何かが発生して、復活したのでしょうか。

「そして、今度は復讐に来たのでしょうか。」

「あのー天使の復活と、この地へ来ることに何の関係が？」

「墮天使よ、来たれし時は、雛菊を。」

「それ、有名な俳句ですよね。」

「この地域の特有花は？」

「雛菊！」

「この地域が墮天使の出現に何らかの関わりをもっているの。」

「ちなみに、私達は、今日会ったばかりだから。」

今のは全部レイが喋った言葉です。よくこんな長々と演説気どりができたものだ。たぶん最後のはボケなのだろうが、実質のところ本人に聞かないとわからない。

「その事について説明したら、おばあちゃんは治るの？」

「たぶん…断言はできないけど。」

「私も仲間に入れてくれないかしら？」

「OKよ。」

「こっちとしては、人数が多いほど好都合だから。」

第二章・ボロアパしゅうじょーず（後書き）

感想よろしく

第三章：1週間とは恐ろしい…（前書き）

キャラクターデータベース

「サクヤ」

ツンデレ的だが、デレはない

得意魔法系統：火魔法

性格：ツン

B 79 W 53 H 75

年齢：26歳

身長：169

趣味：紅茶で一服

特技：ナイフを投げる事

第三章：1週間とは恐ろしい…

「私も仲間に入れてくれないかしら？」

あの時は、なんか興奮してて、つい言っちゃたけど大丈夫だろうか…。こんなことを思いながらベットにもぐり、はや2時間。全然眠気が来ない。たぶんまだ興奮してるのだろう。時間はもう深夜の2時。良い子も悪い子もベットに入ってスカピーしている時間帯だ。部屋は時計の音だけが鳴り響いていた。

「考えても仕方ない！よし、おやすみ！」

発言とわずか23秒でスカピータイムに入った。

さっきの部分に全然関係なく。一周間後のこと。無事歓迎会も行い、すっかり仲良くなって、この生活になじんでいた。仕事は全然しなくなったとき。

クックドゥードゥールドゥー！（アメリカではコケコッコの事をこういうぞっ！）

ニワトリは全然関係無く、目ざまし時計が鳴り響いた。しかし、サキではない。8号室から聞こえる。その騒音にサキは眼がさめた。そして、即外にでて、「うるさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

考えたことは皆同じ。8号室の人以外全員外にでてそう叫んでいた。すると、8号室から、ゾンビに襲われつつ耳元でダイナマイトが2〜3個一気に破壊されたような顔（わかりにく顔のこと）をした、ユキが出てきた。あの騒音、『これさえあれば絶対に起きれます。@近所付き合いが悪くなったりするかも目ざまし時計。定価2560円』の殺意的騒音力を間近で聞き、死にそうになった本人が登場した。

「ユキ〜明日それ使ったら殺すね〜」

下の2号室サクヤがそういった。

「サクヤ、それはいい過ぎよ！、仲間なんだから。」

アヤがそういった瞬間、ユキが何かに気付いた。

「つかぬことおたずねしますが、皆さん、私たちは何の仲間なのでしょう。」

「あんだバカ？それは…なんだった？」

キリノも忘れている。

1週間とは恐ろしい…

「そんな事も忘れては困るな、皆さん。初歩的な推理だよ。ワトソン君、皆に説明してくれたまえ。」

レイミがおどけて、ユイの方を向く。

「えっ、わっ、私！。あっ、ハイ。忘れました。ズバツと言ってやって下さい、ホームズさん」

「えっ、それは…その…」

ホームズをも度忘れさせる。1週間とわ恐ろしい…

「も、皆、何忘れてんの？」

サキが割り込んだ。この、スーパー天然超ドジッ子が言うことはほぼ99%はずれである。

「1日30食限定の『ごくウマ、食べたら口からウマイーってレーザー光線が出るようなスーパーケーキ』

を手に入れるために、少しでも人数が多いほ……………」

「違います！皆さん。堕天使の破壊です！ふう〜1週間とは恐ろしいものです。」

ミユキが半分キレぎみで割り込んできた。

普段は優しい眼鏡っ子のミユキがキレぎみなので、皆が一気に静まり返った。

「ふう〜ミユキさんとは恐ろしいものです。」

ユキがふざけて言いました。

ミユキの攻撃！

ユキは力尽きました。

そして、まじめに仕事をしていたミユキによると、この1週間、結界が大きくなったり、ついにウイルスによる死亡者がでたり、米の自動販売機にゴキブリが入っていたなどの事件があったらしい（最後の関係無いじゃんって思った？気にしたら負けだよ。あと、最後のはミユキ流のジョークらしいぞっ！）

「それはまた大変ね」。最後のは除くけど」
アヤがぼそつと言った。

ユキはさっきのジョークで笑いコケて、ただいま発言不可能です。

「それでね、少し、有力な情報が入ったの。」

ミユキがうれしそうに言った。

「実は、結界が大きくなる前に雛菊が光ったのを見た人がいるのよ。」

「よし、行くか」

キリノの発言に皆が賛成した。

第三章：1週間とは恐ろしい…（後書き）

感想よろしく！

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。（前書き）

キャラクターデータベース

「ミユキ」

メンバーでゆいつの眼鏡っ娘

得意魔法系統：風魔法

性格：天才だが少しドジっ子

B 8 4 W 5 9 H 8 5

年齢：2 5 歳

身長：1 7 1

趣味：読書

特技：本の暗記

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。

深い森を脱けると…

「わゝ、綺麗！」

アヤは声を漏らした。

そこは、一面が雛菊に覆われてあた。

雛菊調査に行く事になったサキ達は、情報を元にこの場所を探し出した。

そして、今にいたる。

「あら、お客さん？」

誰もいない、雛菊園で透き通るような、麗しい声が聞こえる。

「貴方は…誰？」

サクヤが反射的に言返す。

「私？、さあゝ、誰でしょうね？」

謎の声が淡々と聞こえる。

「まあ、とつと出てきなさい！」

今日の朝、楽しみにしていた、マグロを魚に取られたうえ、ごはんを焚くのを忘れていて、今日は朝ご飯を食べていないサキがイライラしながら言った。

「まあ、そんなにイライラしなさんなっで！」

この言葉と共に、辺りが静まり返った。
と、

「なっ、何！」

周りの木達が急に揺れだした。そして、奇妙なメロディーまで流れ出した。

「ピアノ？」

ミユキの言った通り、メロディーの正体はピアノであった。曲名『血の紅にそまる兎』（この世界でだいぶ前に作られた曲で、音階が外れすぎていて聞く者を不快にする）そのメロディーは、聞く者の頭に直接入り込むような感じだ。

「あつ、あああー！」

急にユキが叫びだした。頭を抱えている。

「ユキ、どうした！」

キリノがユキを気遣った。

「ユキさんは、水の魔法使いさんなのね。」

謎の声が大きくなった。

「間違いない。近づいて来ている。」

レイミが気付いたが…

バタ！

ユキが倒れた。

「ちよつと、貴方は何者！」

サクヤがキレた。

「私？、私は、裁曇寺千亜樹^{さいとうんじちあき}」

また声が大きくなった。

「風が早い、キリノ逃げて！」

ミユキの一言に反射的に逃げた。

サツ

服に切れ目が入る。

「ありがと…」

「サキ逃げて！」

キリノの声は、ミユキによって消された。

サキも反射的に逃げた。

皆の目の前に綺麗な少女が現れた。

「貴方は…」

ミユキは知っているように答えた。

第四章：知らない人に話かけられたら、全力で無視しよう。（後書き）

感想よろしく

第五章：風鈴少女（前書き）

キャラクターデータベース

「チアキ」

初の敵キャラ

得意魔法系統：風魔法

性格：ウザい

B？W？H？

年齢：？

身長：173

趣味：？

特技：神速

第五章：風鈴少女

「なんで！なんで貴方が…答えなさい！チアキ！」

ミユキは彼女を知っているようだ。

「ちよつ、ミユキ！落ち着いて。」

めうすぐブツチンって鳴ってドカーンってなりそうなミユキをユイが止めた。

「てか、説明してもらわな訳がわからん。」

こう言ったレイミに対して、ミユキが呟いた。

「お母さんを…お母さんを殺したのよ！」

話口調はどんどん大きくなる。

「私が、この仕事に着いて、3ヶ月が過ぎた位に大量殺人を繰り返したのが彼女！その時にお母さんが！」

許せ無かった！そして、ようやく彼女を捕まえたの！もちろん、次元追放にしたわ！」

彼女の目に涙が浮かんた。

「なのに…なのに、なんで貴方がここにいるのよ！」

ミユキが杖を振った。大きな風の刃が彼女に向かいかかる。

もとい、ミユキは風の魔法使い。相手の風向きを読むくらい簡単に出来る。

「ミユキ、貴方には感謝してるわ」

「レイミ、逃げ…キリノ！」

レイミに向かいながらキリノに攻撃。逃げきれ無かった。キリノが木に叩きつけられる。

そのまま、レイミに突撃！レイミも木に叩きつけられる。

ユイが自己結界を張る。ユイの結界は、防御の力があり、衝撃を和らげる。

が

チアキは無駄に強い！

結界を破壊！ユイもダウン。

チアキは、ミユキに攻撃をして来ない。ミユキはチアキに攻撃しているが当たらない。

「サクヤ！」

ミユキはサクヤをかばおうとするが、間に合わない！サクヤは気付いてとつさにバリアを張る。
が

チアキはお構いなしに突撃する。

チアキの捨て身タックル！サクヤは力尽きた。

ゲームオーバー

ミユキがサキに近づく二人は背を向けるように立った。

チアキの突撃が始まった。今回はサキにも見える。見えると言うか、姿は見えないがかなりの突風がサキの方向にレールを作った。

そのレールに挟まれたサキはあまりの風の強さに、身動きが取れない。ついでにミユキも助けられない。
と

「あつ、お金が落ちた。」突風で落ちたお金を拾うためにサキはしゃがんだ。

「ちよっ！急にしゃがまないでつて、うわぁー」

目標がにかわされコントロールがとれなくなったチアキが木に激突！頭の上でピヨピヨしたものが回っている。

「でかした！サキ！」

ミユキがそう言つて、杖を振った。

さあ、ロククンロールの始まりだ！（皆様のご想像にお任せします。）ちなみに、待ち時間の間サキは、倒れた皆を回復していました。ロールンロールが終わりました。

ピヨピヨが、なんか頭の上に輪ツカのあるものに代わり、うにあゝつてなっている。

「チアキ、急になったんだけど、さっき、感謝してるとかなんとか

言っていたよね？」

ミユキの質問に対して返事が無い。

当たり前だ。気絶しているのだから…

「まっ、いつか。」

その後、ミユキはチアキをロープでぐるぐる巻きにして、回復した皆とかわりばんこで、ひきずり回し、警察にひきわたしました。

その時、皆はこう呟きました。

「ミユキって恐ろしい。」

もちろん、全員、力尽きました。

第五章：風鈴少女（後書き）

「ミユキって恐ろしい。」

第六章：明日使え無い超ムダ知識（前書き）

キャラクターデータベース

「アヤ」

赤髪のリーダー的存在の女の子

得意魔法系統：草魔法

性格：しっかり者

B 85 W 61 H 10

年齢：28歳

身長：180

趣味：魔法薬調合

特技：ピアノ

第六章：明日使え無い超ムダ知識

前の事件の次の日。

あるニュースが報道された。

内容は、結界が消失したと言うものだった。そして、事件が解決の一途をとげた。あの謎のウィルスは雛菊の基本成分を魔法でなんとかやらというもので、中和用のワクチンが作れるとか作れないとかである。

しかし、その中和用のワクチンを作るのに必要な彼岸花が、枯れ初めたらしい。

「彼岸花が枯れたってどういう事よ！」

サキがキレた。

「いやいや、テレビにキレんでも。」

ユイが軽くツツコむ。

「でも、急に消えるなんて変ね？」

サクヤが不思議がるのも無理はない。彼岸花は魔法のなんたらで、枯れない用にしてあるのだ。（葬式用に）

「そういえば、昔聞いた事があるんだけど、この村の隣の村に、草魔法の天才がいて、その人は、どんな所の草でも、枯らしたり、生やしたり出来るとか出来無いか。」

ミユキが何気なく言った、今後、知らなくてもいい明日使えない超ムダ知識にアヤが反応した。

「その人なら知ってるよ。てか、会った事あるよ。」

「なんで！」

皆が食い込む。

「サイン会」

「はっ？」

「だから、サイン会」

「いやいや、その前に、そんなババアのサイン欲しいか？」

ツッコミ担当のユイがツツコむ。

「ババアじゃ無いよ。まだ34だよ。」

「えっっー」

皆がびつくりしてアゴが長いかんじになったりならなかったり。

（注意、びつくりしてもアゴは外れません。外れたら、即、病院に行きましょう。特に、アニメの見すぎな人や、ガキンチョは、ちゃんと覚えておいてね。）

「そんなにびつくりせんでも。」

アヤが呆れた。

「んじゃ行くかー」

キリノが言いました。

選択肢が、『行こ』と『GO』の二つしか無いので、（拒否しても却下されるので。分かりにくい、分かりたくないという人のために例文を用意したよ。

「んじゃ行くかー」

「嫌!」

「いついく?」

こんな感じです。」

）

行く事になりました。

第六章：明日使え無い超ムダ知識（後書き）

感想よろしく

第七章：海で迷った時は船が助けに来る。 山の場合はクマが…助けに来てくれろ

キャラクターデータベース

「ユイ」

青髪の女の子で謎が多い

得意魔法系統：土魔法

性格：いざとなるとかなりしっかりする

B 76 W 50 H 77

年齢：23歳

身長：159

趣味：？

特技：？

第七章：海で迷った時は船が助けに来る。 山の場合はクマが…助けに来てくれ

「やっと町に着いた。」ユキが口をポカンと開けた。

「ここ町？」

サキがミユキをみる。

「マップによると…」

「どう見ても森じゃなかー！」

ユキがツツコミを入れてみる。

そう、辺りはただの森。

「別名『幻想町』…」

アヤの声に他の皆が食い込んだ。

「祭壇町の別名よ。」

「あの…どういう事でしょうか？」

サキが聞き返す。

「祭壇町。森の中にある、ギネス認定の行きずらさを持ち、外部者で行けた者はいないとか…」

「ちつよと！アヤが会ったって言ったじゃない！」

レイミがキレた。

「いやいや、こんな所まで来て会いたいとは思わんよ。」

空気が流れが止まったので少し、お待ち下さい…

「ま、まあ…こんな所でいても意味が無いから町を探そ…って、あれ人だ！」

サキが声を上げると。

「こちらでも確認した。あれは間違いなく人間だ。」どこからともなく、軍人の声が聞こえま… сенでした。

「何？今の声？」

ユイが言いましたがミユキが

「聞こえ無かった事にしましょう。」

「ラッ、ラジャー！」

皆がミユキに敬礼しました。

「あのーすみません。」

サクヤが謎の人物に声をかける。

「はい、何でしょうか？」

「あつ！この人だよ。伝説の魔法使い！」

振り向いた、謎の人を見てアヤが声を上げた。

「あのーどうかしましたか？」

「すみません！祭壇町に行きたいんですけど。」

ユキが理由を長々と説明するまでしばらくお待ち下さい…

「祭壇町？そんな町もう無いよ。」

「へ？」

皆が疑問符を浮かべる。

「あのーいつから無いんですか？」

「昨日。」

「何で潰れたんで…」

「キリノ逃げろ！」

レイミの声が響き渡る。

「へ？」

一歩後ろに後退りをした。刃物が彼女の前を通り過ぎる。

「何故って？私が潰したからに決まっているじゃない。」

全員が戦闘準備に入る。

『いい、私の声は、皆の脳に直接話かけているの。だから、彼女に

は聞こえ無いの』

レイミの声が脳内に響き渡り不快である。（嘘です。たぶん…）

『今から言う作戦を実行して。』

第七章：海で迷った時は船が助けに来る。 山の場合はクマが…助けに来てくれる

感想よろしく

第八章：作戦は、上が考えた、机上の空論（前書き）

キャラクターデータベース

「レイミ」

あまり発言しない？かなりの実力者

得意魔法系統：闇魔法

性格：怖い、陰険

B 8 3 W 5 8 H 8 0

年齢：2 5 歳

身長：1 6 6

趣味：魔方陣を部屋に書く

特技：相手をおちよくる

第八章：作戦は、上が考えた、机上の空論

『まず、彼女は操られているわ。影が無いでしょ。あれは、闇魔法の中でもかなり特殊な影操りで、解除するのに時間がかかるわ。そこで、皆に時間稼ぎをしてほしいの。あと、犯人探しも。近くにいるはずだからね。』

レイミが少し、考えてから何をひらめいた。

『あつ、アヤが犯人探して。アヤ、草の魔法が得意だから、解除した後犯人を草かなんかで縛って。』

アヤが軽く笑った。

「何を止まっているの？早くかかって来なさいよ。」

「言われなくても、とつとと行くわよ！」

レイミが、伝説の魔法使いを睨み返した。

『戦闘開始！』

合図と共に、皆が散会した。

まず、レイミが手を上に上げた。すると、レイミの周りに紫色の結界が現れた。レイミは何かの呪文を唱えているが、何を言っているのかは、聞き撮れない。

次に、サクヤがレイミの周りに補助結界を張り、レイミへの攻撃をガードする。

アヤも、無事に相手に見付からずに皆から離れる事が出来た。そして、森の中をくまなく探す。

他の皆は、相手を引き付けている。

実は、前回の事件以来、派手な戦闘が考えられるために、皆は毎日特別訓練をしてきたのである。

そのせいか、パーティー壊滅は無さそうだ。

相手が草の魔法使いなので、火が得意なサクヤに攻撃してもらいたいのだが、サクヤは結界を作るのが得意なので、そっちを優先してもらっている。

一方、水の魔法使いのユキは、無駄に速い足を使って相手を覚乱させている。

他は、各自適当に相手を攻撃している。

まあ、伝説の魔法使いと言うだけあって、かなり強い。無駄な爆発の連発で、森はメチャクチャになっている。もし、誰かの所有物なら1千万は降らない弁償金を払っているぐらいだ。

相手は、かなり強い草攻撃を連発している。

全員逃げるのに精一杯だ。

「あら、早く攻撃して来なさいよ。」

『だめだ、挑発に乗るな』レイミの声が脳内に響き渡る。

「あつ、サクヤごめん！」キリノが足を踏みはずしてコケた。

相手の攻撃がサクヤの方に飛んで行く。

バシッ

少し火花が散って結界にダメージが出る。

「なっ、何よこれ！」

サクヤが怒鳴る。

「何で一発の攻撃で結界にヒビが入るのよー！」

サクヤは全力で結界を張っている。二度目の結界はもう張れない。

「レイミ、駄目、後一発食らったら結界が消える。」全体から焦り

が見える。

と

アヤがレイミの後ろを通り際に

「本体を発見したわ」

と呟いた。

しかし、その矢先

「サクヤ、ごめん。行つた！」

ユイが攻撃を抑えきれなかった。

バスケットボール位の緑色の玉が飛んでくる。

このままじゃ、結界を突き破る。

「ダッ、ダメ！」

サクヤが叫ぶ。

第八章：作戦は、上が考えた、机上の空論（後書き）

感想よろしく

第九章：きれいに舞い散る彼岸花（前書き）

キャラクターデータベース

「伝説の魔法使い（本名：霞原綾野）」

神の草魔法を使える。

得意魔法系統：草魔法

性格：？

B 8 2 W 5 6 H 6 5

年齢：3 4

身長：1 7 2

特技：瞬時に世界中の花をコントロールできる

趣味：造花作り

第九章：きれいに舞い散る彼岸花

サクヤは、目をつむった。

「あれ？」

結界は無事だ。

すると、目の前でサキがバリアを張っていた。

「サキ……」

バタッ

伝説の魔法使いは倒れた。

「危なかった」

レイミの周りにあった光が消えた。
成功したらしい。

「ちょっと、大丈夫？」アヤが近づいてくる。

「アヤ、おかえり」

キリノがそう言った後に付け加えをした。

「何？それ」

「えっ、あゝ本体」本体は草でぐるぐる巻きにされている。
しかも、それをアヤが引きずっている。

扱いはゴミだ。

「さーてと、本体の顔でも見してもらいましょうか。」

レイミが近寄り、草をちゅっとめくった。

「やっぱり貴方だったのね。」

レイミの言葉に全員が疑問符を浮かべた。

「へっ？知ってるの？」

「しかも、やっぱりって…」

「どういう事？」

次々と質問が飛び交う。

「あー、こいつタダの魔法バカよ。」

「へ？」

サキが疑問符を浮かべる。

「この世界で一人だけ…いや、一人だけだった、全身操りができる人物。網谷香李（アマタニカオリ）よ。」

間をおいてから、レイミは口を開いた。

「ほら、結構前にあった、リツコの連続殺人事件の新犯人よ。」

リツコ殺人事件とは、8年前に起きた殺人事件で、犯人のリツコに魔法捜査の後が見られたので無罪となった事件である。

「えっ、でもあれ、犯人見つからなかったんじゃ…」「紙面上わね。ていうか、マスコミもそんな昔の事件を忘れていたのよ。」

「それで、ま、判決はもちろん次元追放。」

「そんな真実が！」

驚いたのは、サキだけではない。

他の皆も呆然としている。

モアイ像だ。

「帰るか。」

アヤが言った。

「ちよつとまって。」

その声に全員の背筋に冷や汗が流れた。

なんせ誰の声でも無かったからだ。

「誰！」

サクヤが声を上げる。

声は少し震えている。

「あーのー」

ふと足元を見ると伝説の魔法使いが倒れている。

「もしもし」

「あつ、！」

全員が声を上げた。

忘れていたのだ。

サキが速急に回復魔法をかけた。

その後、色々と事件についての説明をした。

「それで、私に彼岸花を生やしてほしいと。」

「まっ、率直に言うтそういうこと。」

「いいわよ」

彼女の周りに結界ができた。

魔法が終わると、周りに花が巻き散った。

色とりどりの花が舞った。

しかし、どの花よりも、笑っている皆の笑顔が一番きれいだった。

「助けてくれたお礼よ。」

降りしきる花びらの中、8人の魔法使いは、笑っていた。

その後、伝説の魔法使いはその後保護され、カオリは前回同様引きずりまわしながら警察にプレゼントした。

第十章：夏の炎天下の中で掃除をすると倒れる。（前書き）

キャラクターデータベース

「アミタニカオリ」

世界に一人だけの全身闇操りができる

得意魔法系統：闇魔法

性格：？

B？W？H？

年齢：？

身長：？

特技：？

趣味：？

第十章：夏の炎天下の中で掃除をすると倒れる。

まあ、彼岸花は復活した訳で、患者はほとんど治療が済ほとんどが退院していった。

一連の事件に関わったサキは、皆の勧めもあり軍人になった。また、その功績から階級は小佐。

そして、サキ達の活躍と実力が相手にも知れ渡り最近は何の事件も起きない。

こちらからも、相手の場所が特定できず踏み込めない。

まあ、今は仮の平和になっているという訳だ。

「ということで、大掃除をしよう！」

サキが目覚め早々皆を外に集めてとんでもない事を言い出した。

「どういうこと?」

全員が聞き返す。

「そういうこと」

天然の答えが返ってきた。

「てことで、各自自分の部屋を綺麗にきなさい！」

・・・

「あのー私の部屋、昨日掃除したばっかなんですけど…」
ユイが言う

「えっ」

「あたしも右に同じ」

アヤがユイを指す。

「えっっ」

サキの口が少し開いた。

「あたしもよ」

サクヤが手を挙げた。

「えっっっ」

サキの口がまた開いた。

「私も同じく」

ミユキが言う。

「えつつつ」

サキの口が微妙に開いた。

「同類項」

レイミがボケた。

「えつつつつ」

サキは口を開いたが、レイミのボケの意味がわからない。

「やつたぞ〜〜〜」

キリノも言った。

「えつつつつつつ」

サキの伸びた顔がユキを見つめる。

「あつ、あたしもやつたよ」

「!!!@!!!」

サキの顎が外れた。

(嘘です)

掃除嫌いのユキが掃除をしたので……

「私が悪ございました。皆さんどうか手伝って下さいまし。」

あやまつた。何故だか。

「
いい
よ、
別に」

皆の温かい目がサキを見つめる。

皆がサキの部屋に来た瞬間、温かい目が冷たい目へと変わった。

「きたなっ」

「うん」

「歩けない」

「ギブ」

思い思いを口にした。

「体長、ミユキが倒れました。」

レイミがミユキをつれてアヤの前に来た。

「体長、ユキが腹痛を起こしました。」

サクヤも来た。

「体長、キリノがおかしくなりました。」

ユイも来た。

「体長、速やかに御決断を。」

「退け、退却！本陣へ戻れ、ゴミ艦隊は強すぎる。」

皆が帰ろうとすると…

「みんな〜待って下さい〜」

サキが近づいてきた。

「ゴミ艦隊の親玉が突撃を仕掛けてきました。」

「全力で振り切れ〜！」

サキは掃除は好きだが、溜め込むのも好きなのだ。
なので、ニート生活者みたいな部屋になっていた。

「ね、ね、お願いします〜〜！」

サキは涙目になりながら、説得を続けていた。

「わかったよ」

アヤがOKした。

皆もぽつぽつとOKした。

「あ、ありがとうございます！」

そんなこんなで掃除が始まりました。
が！

「サキ、この変な靴下いる？」

ユイが黒い靴下らしき物体うを取りだした。

「それマジックアイテムです。置いて下さい。」

サキは、掃除をしながら答えた。

「サキ、このカップラーメンの容器みたいなのわ？」
今度はキリノ

「それもマジックアイテムです。」

カップラーメンの容器を持ちながらキリノは固まった。「絶対マジックアイテムじゃないよ。」とツツコミたかったがやめておいた。

「サキ、このカビたキノコわ？」

「サキ、このビール瓶わ？」

「サキさん、この腐った鯛わ？」

「サキ殿、このゴミ袋一式わ？」

「この使った綿棒わ？」

「この茶色いトマトわ？」

皆の質問が来るたびの

「それもマジックアイテムです。」
と受け流す。

「ようやく終わった」

サキが汗を手でぬぐいながらこういった。

「嘘つけ！」

皆は叫んだ。

さっきのマジックアイテムを廃棄処分しようと、一生懸命ゴミ袋にマジックアイテムを詰めていく。

「あんだね」

不服の声が聞こえる。

そうして、この穏やかな一日は過ぎていった。

第十一章：ロボは大き過ぎると動かない。ちなみにフープって78%できない

キャラクター

第十一章：ロボは大き過ぎると動かない。ちなみにワープって78%できない

「おい、皆さーん！」

アヤの呼ぶ声が聞こえる。

「ん？」

部屋から全員が出る。

「なに？」

皆の疑問をミユキが代表して聞く。

「なんか、事件です。」

「へっ？事件？」

「そうです。あっ！こうしちゃいられない。早く仕度しなきゃ。」

アヤが慌てて部屋に戻り…

「はやっ」

ました。と思いきや帰ってきました。

「なに突っ立つてるの！早く仕度して！」

「武器持参？」

「当たり前でしょ！」

「こらっ！遅い！」

「いや。アヤが早すぎなんだって。」

皆の率直な思いを代表してサクヤが言いました。

「つべこべ言わない！」

「さっ、早行くよ！」

ようやく着いた。はずなのに、町が原型を留めていない

「何？あれ」

「ロボット？」

「センス悪っ」

「あれ、廃材で作ったんじゃない？」

燃え盛る町の中の巨大とまでは言えないロボットに思い思いを口に
する。

「アヤ、あれを倒せと……」

皆の呆れた気持ちを代表してユイが言いました。

「そっ！」

開始早々26秒で

グチャ、バキ、グサ、バリッ、プスー、ボンという怪しい音が聞こえ
開始早々42秒でドカーン

ロボットは壊れました。

「ふゝ弱かった。」

あまりの弱さに……

「ねっ、さっきネジが動かなかった？」

ふとキリノが口にするや否や、そこいらに散らかっている貴金属（
残骸）が空中に舞い急に襲ってきた。

「何！」

全員がバリアを張る。バリアの外では貴金属がバリアに当たって火
花を散らしている。

しかし、貴金属単体では攻撃力が低いため、摩擦熱で燃え尽きたゆ
く。

「この中ならー安心ね」

確かにバリアの中なら攻撃は完全に無害だ。

しかし

「何これ！」

ボルトが自爆をし始めた。

バリアの被害はじょじょに深刻になっていく。

「爆発するという事は」

と、レイミが言う

「近くに魔法使いがいるということね。」

サキが応答する。

「でもどうやって探すの？」

ユキが質問する。

『とりあえず、隙を見て散会しよう』

これはレイミの脳コンタクト。前に一回使って以来、使用していなかったため全員が少し驚く。

バン

ドカン

次々に襲い来るネジやボルトや装甲板

「くそく隙なんかないじゃない」

サクヤがム力ついて攻撃をした。

「ん？」

サクヤが何かに気付いた。

「わかった！」

「何が？」

「ボルトの次にネジが飛んでくる時は装甲板が反対に飛んで来るの。」

「

「んで？」

「だから、装甲板に攻撃して。」

「何で」

「いいから。」

「わかったよ！」

全員が攻撃を試みる。

ドン

装甲板が爆発した。

すると、近くにあったネジやボルトが攻撃機能を停止した。

「どういうこと？」

アヤが聞く

「つまり、装甲板が操作魔法の受信機なわけ。」

「なるほど！」

『んじゃ、これを使って隙を作って散会しよう。
全員が親指を上にした。OKの合図だ。』

第12章：しょせんメガネはサブアイテム的存在みたいな。

バン

次々に破壊される装甲板、機能を停止するボルトやネジや配線。

「ねーまだ？」

全破壊を夢見る一同は頑張っていた。

「もうすぐじゃないの？」

見たところ装甲板1つにつき停止するボルトやネジや配線はどれか2つ。

「よっしゃー！ボルト全滅！」

「やったー！ネジクリア！」

「配線、全滅完了！」

すべての残骸を破壊しあ一同は喜んでいた。

「おいおいおい！僕の可愛いポチちゃんに何してくれるだい！」
目の前に、黒い長い髪をして、メガネを掛けたいかにも頭の良さそうな女性が現れた。

「誰ですか？」

「私は、超天才発明家の大内由美だ！」

「すみません、知りません」

「…」

「そんな事は、どうでもいい、よくもポチを！」

「ポチってさっきのロボットですか？」

「そーだよ！」

「キリノ、あの人変態だよ」

「そだね」

「おもいつきり聞こえてるよー！、誰が変態だ！」

「ねーねーサキ」

「ん？」

「今日の晩御飯何？」

「キムチ鍋」

「やった！」

「キ・ム・チ・な・べじゃねー！、人の話を聞け！」

「すいません、うるさいです。」

「あー、もう頭にきた！」と言いながら手にあったボタンをおす。

「おい、ミユキ、あれなんだ？」

青空に何かが光る。

「……………」

「逃げろー！」ドカーン。

上から巨大なビームが飛んできた。

「見たか！『半径6メートルを丸々破壊君3号』の威力！」

「なんだなんだ、あのネーミングセンスの欠片も無い名前は。」

「ネーミングセンス無い言うな〜！」

少し、いや、かなりキレ気味な大内由美は、さっきの『半径6メートルを丸々破壊君3号』の発射装置のボタンを連打する。

上から無数のレーザーが飛んでくる。

「なんか、ヤバくない？」

サキが全員に問いかける。

「うん、物凄くヤバイ」

全員がハモった。

第十三章：18番？/キムチ鍋？キムチ鍋？

「ハハハハ、私が新世界の神だ！」

アホなことを口にしながら、ボタンを押しまくる大内。

……

ボタンに手応えがない。

たぶん、発射ボタンを押す時に新世界の神だのアホな事を考えていたら手につけた加速がドンドン強くなってボタンのヴァネが耐えきれなくなり中にある装置を壊したのだ。

まあ、簡単に言っていると故障。上から何も落ちて来ないと、話しは別で……

8対1の圧倒的戦力差になるわけで……

当然、大内わ捕らえるわけで……

いつもの十八番引きずり回しの刑をうけ……

当然、ボロボロになりながら、警察に突き出されたわけで……

一件落着と言ったわけで……

そのまま、スーパーでキムチ鍋の材料を買って帰りました。

どうも、お後がよろしいようで？

と、言ったものの、話しはまだ終わってないわけで……

「わーい、鍋だ！」

……

「ねー、ユキ、一つ聞いていい？」

「なんだい、サクヤ君。」

「これは、何鍋？」

「キムチ鍋」

「……」

「どう見ても、闇鍋だろうガァァ！」

「具からして、病み鍋だね」

「旨いこといわんで良いから」

「いいかんじに微妙な温度加減ね」

「私達の空気がね……」

「あなたも旨いな」

「旨くないって」

「この病み鍋だけに？」

「……」

「手づまった。いや、煮詰まった。」

「ほう、そうか」

「ほな、早速頂きましょうか。」

「ユキ、もう一度聞くよ、これ何鍋？」

「闇……じゃなくて、寄せ鍋？」

「あっそう、なら大丈夫ね。」

その日、トイレが寄せあったようでした。
おあとがよろしいようで？

第十四章：マジで！もうすぐ最終章！その前に魅惑の男性アヤにKH（告白）

今回は長編だ〜！あと、マジでそろそろ最終章に突入だ。

第十四章：マジで！もうすぐ最終章！その前に魅惑の男性アヤにKH（告白）

朝10時3分23秒。

昨日の闇鍋のせいで生死をさまよっていた皆さんは、チャイムで目が覚めた。

普段は、こんなボロアパートに人が来ることはない。来るのは、新聞屋ぐらいである。

サキが仕方なく出る。

そこにいたのは！

なんと、初出場

『男子』様であつた！

「あの、なんでしょうか？」

眠たいながらも、話しかけたサキ。

「すいません、アヤはいますか？」

「いますけど…読んで来ましょうか？」

「お願いします。」

サキは、階段をかけのぼる。

階段をかける少女がアヤ部屋についた。

：

ドワがあいた。

少しビビッたサキ。

「何で私がいるとわかったの？」

「何でって、気配がしたからに決まってるじゃない。」

サキは

『決まってネーヨ、てか貴方はどこぞの殺し屋だ！』とツッコミたかったが、眠たいのでやめた。

「客が来てる。」

サキが言った瞬間

バタ！

大きな音がした。

全ての部屋のドワが開いたのだ。

「…どうしたの？」

苦笑いを浮かべる。

「どうしたって、気配がしたからに決まってるじゃない。」

全員がハモった。

「・・・」

「決まってネーヨ、てかオマエらはどこの殺し屋だ！」
なにはともあれ、アヤは客のところに行った。

ついでに皆もついて行った。

「あ、コウジ君！」

アヤが言った。

「どうも」

コウジと言う男性は少し会釈をした。

「え、何？何？アヤの彼氏？」

レイミのツツコミが入る。

「ええ、そうよ。」

「・・・」

「なんですとー！」

お決まりのハモリツツコミ。

「嘘ですよ」

コウジは、少し笑いながら言った。

「なんだ…」

テンション急降下な全員。

「で、何のよう？」

「アヤ、僕と、結婚してください。」

「・・・」

「アヤは、私の嫁だー！」

「さっきの続きはいいって…、ツッコミ違ーっ!」

アヤが笑いながら言った。

「じゃあ、本題に入ります。」

コウジは、落ち着いた様に言った。

「天使の居場所が分かりました。」

「・・・」

「なんですとー!」

「で、何処。」

「ここの、隣のコンビニでバイトしてました。」

「・・・」

「なんじゃらほーい!」

「ま、冗談はおいといて、ついて来て下さい。案内します。」

「ここは」

全員が驚いた。

「隣のコンビニだろーが!」

「まさか本当にバイト?」

「いえいえ、あれは嘘ですが。」

「じゃあなんで?」

「食料を調達しに。」

「食料って、そんなに遠いの?」

「遠くは無いのですが…」

「その、森とまでは分かったのですが、森の何処にいるかが分かりませんので、自力でさがせとのことなんで…」

「どんだけアバウトな…」

全員が苦笑いする。

「食料以外何か要るの？」

「あ、アタシ今日発売の雑誌買わないと！」

「キリノ、空気読もうぜ」

「あ、ビールとおつまみ買わないと！」

「なにか、サキ、お前は森で宴会でも開くのか？」

「あ、携帯の予備充電器買っておこ」

「ユイ、何に使かうの？」

「ネット」

「たぶん、圏外だー！」

「サクヤ、うるさい。」

「ごめん、ごめん」

サクヤがアヤを見た。

「・・・」

「何持ってるの？」

「え、見てわかんない？」

「分かるよ。」

「じゃあなんで聞くの？」

「クラッカーをどうするつもりだ？」

「んー、鳴らす。」

「宴会でも開くのか？」

「宴会と言うより、宴かな？」

「同じだー！」

「サクヤ、じゃあ聞くけどアンタが持ってるそれ何？」

「これ？、ロープ」

「イノシシでも捕まえる気かー！」

「捕まえネーヨ！」

「そして食う。」

「人の話を聞け！」

「イノシシじゃなくて、天使を捕まえるのに使うの！」

「天使？なんで？」

「すいません、殴って良いですか？」

「ダメです。」

結局、パーティーグッズはだいぶ揃った。

サクヤはもう何も言いませんでした。

「さて、皆さん、車に乗って下さい。」

目の前には、長い車が止まっていた。

「乗りますか。」

「そうですね。」

8人は、車に乗りこんだ。

「では、『樹海の迷宮、天使を探せドキドキエスト』地獄巡り片道切符の旅」略して『ドキクエ』を初めましょうか。」

「イヤなパクリだな。」

「さてさて、片道切符ってことは、帰って来れないって事じゃないか。」

「あつ！すいません。」

「いい直しますね。『樹海の迷宮、天使を探せドキドキエスト』地獄巡り往復切符の旅」略して『ドキクエ』を初めましょうか。」

「オーーーーー…」

「つきました」

「早いわ！」

「では、改めて」

「オーーーーーウ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933e/>

四季蘭采～雛菊～

2010年10月10日15時41分発行